

平成 25 年度

病害虫発生予報第 4 号

平成 25 年 7 月 25 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/boiyosyo/>

目 次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠	7
4. 予察項目の見方	13
5. 今月のトピックス(QoI 剤によるイネいもち病防除の注意点について)	14
6. 気象のデータ	15
7. おしらせ	17

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 作物

イネでは、斑点米カメムシ類の発生量は**多**と予想されます。薬剤散布は穂揃い期に行い、多発圃場では追加防除を実施してください。紋枯病、イネクロカメムシ、ツマグロヨコバイの発生量は**やや多**と予想されます。紋枯病およびイネクロカメムシは発生状況に応じて薬剤散布をしましょう。白葉枯病、トビイロウンカの発生量は**平年並**、穂いもち、セジロウンカの発生量は**やや少**と予想されます。

ダイズでは、コガネムシ類、吸実性カメムシ類の発生量は**やや多**と予想されます。圃場での発生状況に注意してください。紫斑病、ハスモンヨトウの発生量は**平年並**と予想されます。

2) 果樹

カンキツでは、黒点病およびミカンハダニの発生量は**やや多**と予想されます。黒点病は感染源の枯枝を除去し、天候に注意して薬剤散布を行ってください。ミカンハダニは圃場の発生状況をよく観察して、防除を実施してください。かいよう

病(温州みかん)の発生量は**平年並**、かいよう病(中晩柑類)およびチャノキイロアザミウマの発生量は**やや少**と予想されます。

果樹共通では、果樹カメムシ類の発生量は**少**と予想されます。

3) 茶

チャでは、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、チャノコカクモンハマキの発生量は**やや多**と予想されます。チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマは、新葉の開葉初期に防除しましょう。チャノコカクモンハマキは成虫発生最盛期の 10~14 日後に防除しましょう。炭疽病、カンザワハダニの発生量は**平年並**と予想されます。

4) 野菜

イチゴでは、炭疽病の発生量は**平年並**と予想されます。

農薬はラベルの表示を確認して、正しく使用してください。

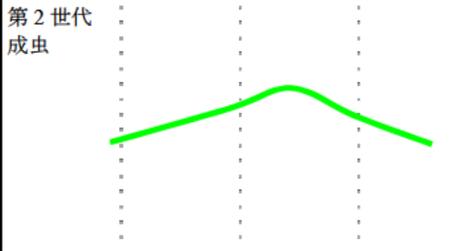
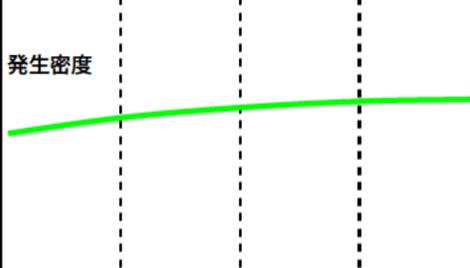
2. 作物別の状況

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月		8月		
						下旬	下旬	中旬	下旬	
イネ	穂いもち	—	やや少	中	普通	出穂 ↓				1) 病害虫防除技術情報第8号(6月28日発表)。 2) 葉いもちが上位葉で発生している圃場では、感染の恐れがあります。発生状況に注意してください。 3) これから出穂期となる圃場において薬剤散布する場合は、穂ばらみ期から穂揃期に実施してください。
	紋枯病	—	やや多	大	普通	出穂 ↓				1) 前年に発生の多かった圃場では注意してください。 2) 高温多湿条件で発病が助長されます。 3) 多肥、過繁茂の圃場では発生しやすくなります。 4) 薬剤散布は出穂7~10日前に実施してください。
	白葉枯病	—	平年並	小	低					1) 常発地では、台風や集中豪雨の遭遇直後に薬剤散布してください。 2) 「みえのゆめ」は弱い品種なので注意が必要です。
	斑点米カメムシ類	—	多	大	高					1) 病害虫発生予察注意報第2号(7月17日発表)。 2) 薬剤散布は穂揃い期に実施しましょう。広域での一斉防除が効果的です。 3) 防除後も水田への侵入が確認される場合は、穂揃い期防除の7~10日後に追加防除を実施してください。 4) 周囲よりも出穂の早い水田では、被害が集中するので防除を徹底しましょう。
	イネクロカメムシ	—	やや多	中	普通					1) 発生圃場では、今後出すくみ穂や白穂被害が目立つようになります。 2) 日中は株元に潜んでいるため、薬剤散布は株元までかかるように行ってください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
							下旬	上旬	中旬	
平年比	平年比	程度	平年比							
イネ	ツマグロヨコバイ	—	やや多	大	低	成虫密度				1)9月上旬までに収穫する圃場では、実害はほとんどありません。
	セジロウンカ	—	やや少	小	低	成虫密度				1) 本年は多飛来がありません。
	トビイロウンカ	—	平年並	小	低	成虫密度				1) 本年は多飛来がありません。
ダイズ	紫斑病	—	平年並	小	普通	発病密度				1)これから播種する圃場では、種子消毒を徹底しましょう。 2) 莢が形成され始めたら薬剤散布してください。
	コガネムシ類	—	やや多	中	普通	成虫密度				1) 通常は防除の必要はありませんが、多発する場合は加害初期に防除してください。 2) ヒメコガネとドウガネブイブイは夜行性の種のため、夕方に薬剤散布すると効果的です。
	ハスモンヨトウ	—	平年並	小	普通	被害量				1) 本年は6月末から播種作業が進められており、平年よりも早い時期から飛来する可能性があります。 2) 白変葉を目印に早期発見に努め、若齢幼虫期に防除してください。 3) 発生量が急増することがありますので、防除所ホームページにおいて、フェロモントラップでの発生状況に注意してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
ダイズ	吸実性カメムシ類	—	やや多	中	普通			開花 ↓		<ul style="list-style-type: none"> 1) 近年、ミナミアオカメムシの発生が、伊勢平坦地を中心に増加しています。 2) 薬剤散布は開花終期から莢伸長期に防除してください。 3) 広域一斉防除が効果的です。
カンキツ	黒点病	—	やや多	中	普通	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 薬剤散布を定期的実施し、8月下旬まで感染防止に努めてください。 2) 梅雨明け後は感染源となる枯枝が増加するので、切除に努めてください。 3) 薬剤散布後、積算で200mm以上の降雨があったら、次の防除を実施してください。
	かいよう病	—	温州 平年並	温州 小	温州 低	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 果実・夏枝に病斑が見られる圃場では、発病した枝・葉・果実を除去し、薬剤防除を行ってください。 2) 防風対策に努め、台風の接近が予想される場合には、直前に防除してください。 3) 高接樹や幼木については、ミカンハモグリガの防除も徹底してください。
	ミカンハダニ	—	やや多	中	普通	成ダニ密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 1葉当りの雌成虫寄生数が0.5～1.0頭程度を目安に防除してください。 2) 高温により活動が停滞する時期ですが、圃場での発生状況をよく確認し、多発している場合は防除してください。 3) 薬剤散布は葉裏にかかるよう、丁寧に散布してください。 4) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避けてください。
	チャノキイロアザミウマ	—	やや少	中	普通	成虫密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 寄生果率10%になった時を防除の目安にしてください。 2) 7月以降は、寄生部位が果頂部に移ります。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	中旬	下旬	下旬	
果樹共通	カメムシ類	—	少	小	低		<ol style="list-style-type: none"> 圃場内を観察し、飛来が認められたら防除を実施してください。 圃場(特にナシ、カキ)によっては局所的に飛来してきます。過去に発生が多かった圃場周辺では注意してください。 ナシ、ブドウの有袋栽培では、袋と果実が密着すると、袋の上から加害されることがあります。 			
チャ	炭疽病	—	平年並	小	普通		<ol style="list-style-type: none"> 二番茶摘採後の降雨により、感染に好適な条件があったと考えられるので、旧葉に病斑が多い圃場や新葉で発生が認められた圃場では、今後の増加に注意が必要です。 予防剤は感染前(新芽展開期で降雨に遭う前)、治療剤は感染後(潜伏期間～発病初期)に防除しましょう。 治療剤(EBI剤)は連用すると耐性菌が出現しやすいので、同一系統の薬剤の連用は避けましょう。 			
	カンザワハダニ	—	平年並	小	普通		<ol style="list-style-type: none"> 二番茶摘採後の整枝により生息はほとんど認められませんが、多発していた圃場では、発生状況に注意してください。 同一系統の薬剤の連用は、抵抗性が発達しやすいので避けましょう。 カブリダニ等土着天敵への影響が小さい剤を選択しましょう。 			
	チャノミドリヒメヨコバイ	—	やや多	中	普通		<ol style="list-style-type: none"> 晴天が続くと発生が多くなります。 新芽の開葉初期に防除しましょう。 一斉防除が効果的です。 			
	チャノキイロアザミウマ	—	やや多	中	普通		<ol style="list-style-type: none"> 晴天が続くと発生が多くなります。 多発圃場では、新芽の開葉初期に防除しましょう。 一斉防除が効果的です。 			

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
チャ	チャノコカクモンハマキ	—	やや多	小	普通	第2世代成虫		<ul style="list-style-type: none"> 1) 第2世代成虫発生時期は、平年に比べて半月ほど早くなると予想されます。 2) 若齢幼虫を対象とした防除が効果的です。防除適期は成虫発生最盛期から10～14日後です。 3) 防除所ホームページにフェロモントラップ誘殺数を掲載していますので参考にしてください。 4) 二番茶でジアミド系薬剤を使用した場合は、薬剤抵抗性の発達を避けるため、他の系統の薬剤を使用してください。 		
イチゴ	炭疽病	—	平年並	中	普通	発生密度		<ul style="list-style-type: none"> 1) 発病株は感染源となるため、周辺株も含めて速やかに除去し、圃場外に持ち出して適切に処分してください。 2) 薬剤による予防防除を徹底してください。葉かき作業後や降雨、台風等の前後は特に重点的に防除してください。 3) 耐性菌の発生を防ぐため、同一薬剤や同一系統薬剤の連用は避けてください。 4) 病原菌を含む水滴の跳ね返りによって感染が拡大します。水滴が跳ね返らないよう、丁寧に灌水を行ってください。 		

3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	穂いもち	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月19日発表)によると、期間の前半は平年に比べ晴れの日が少ない予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、葉いもちの発生圃場率6.6%(平年36.0%)と少、発病度0.3(平年3.9)と少、発病株における上位葉への進展率0%(平年2.1%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、葉いもちの発生量は少~平年並(概して少) (-)</p> <p>考察: 巡回調査結果および一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	紋枯病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率17.8%(平年8.7%)と多、発病株率1.8%(平年1.5%)と平年並 (+)</p> <p>2) 一般圃場では、発生量は無~平年並(概して平年並) (±)</p> <p>考察: 巡回調査結果を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	白葉枯病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 7月上旬以降、強風を伴う集中豪雨の発生はなし (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率0%(平年0%)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無~少(概して平年並に少) (±)</p> <p>考察: 現状の発生量は平年並に少と考えられ、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	斑点米カメムシ類	-	多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月19日発表)によると、期間の前半は平年に比べ晴れの日が少ない予想 (-)</p> <p>2) 予察灯(松阪市・6月第1半旬~7月第4半旬)では、誘殺数はアカスジカスミカメ103頭(平年31.9頭・水田位置)と多、アカヒゲホソミドリカスミカメ174頭(平年50.3頭・水田位置)と多、クモヘリカメムシ7頭(6年平均0.5頭・畑位置)と多の傾向 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、圃場内および畦畔イネ科雑草すくい取りによる、中型種(ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシ類)の発生地点率36.9%(平年33.1%)とやや多、すくい取り成幼虫数1.6頭(平年1.3頭)と多(+), 微小種(アカスジカスミカメ)の発生地点率38.8%(平年20.7%)と多、すくい取り成虫数3.9頭(平年2.6頭)とやや多(+)</p> <p>4) 広域防除員調査(7月上旬)では、圃場内および畦畔イネ科雑草すくい取りにおいて、県内の広い範囲でホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシ類の発生を確認 (+)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量は平年並~多(概してやや多) (+)</p> <p>考察: 巡回調査結果、広域防除員調査結果および一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	イネクロカメムシ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(松阪市・4月第1半旬～7月第2半旬)では、誘殺数は水田位置13頭(平年11.1頭)とやや多、畑位置504頭(平年260.2頭)と多 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率13.4%(平年21.6%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少～やや多(概してやや多) (+)</p> <p>考察: 予察灯および一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(6月第1半旬～7月第4半旬)では、誘殺数は松阪市・水田位置7頭(平年10.2頭)とやや少、松阪市・畑位置3792頭(6年平均4775.0頭)とやや少の傾向、伊賀市9頭(平年149.5頭)と少、紀北町13頭(平年17.7頭)とやや少、御浜町26頭(平年9.2頭)と多 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率43.1%(平年28.4%)と多、払い落とし成虫数3.3頭(平年3.5頭)と平年並 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～やや多(概して平年並) (±)</p> <p>考察: 巡回調査結果を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	セジロウンカ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(5月第1半旬～7月第4半旬)では、誘殺数は松阪市・水田位置0頭(平年5.6頭)と平年並に少、松阪市・畑位置7頭(5年平均191.0頭)と少の傾向、伊賀市2頭(平年4.2頭)と平年並に少、紀北町3頭(平年43.3頭)と少、御浜町2頭(平年60.0頭)と少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、紀州での発生圃場率0%(平年44.0%)と少、払い落とし成虫数0頭(平年2.0頭)と少、県全体では発生圃場率0%(平年12.1%)と少、払い落とし成虫数0頭(平年1.1頭)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並(概して平年並に少) (±)</p> <p>4) 九州各県の病害虫防除所情報では、7月上旬まで多飛来の報告はなし (-)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果および一般圃場の発生状況、他県の飛来状況から、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	トビイロウンカ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(5月第1半旬～7月第4半旬)では、松阪市、伊賀市、紀北町、御浜町ともに未飛来(平年7月上旬まで未飛来) (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率0%(平年0%)と平年並に少 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並(概して平年並に少) (±)</p> <p>4) 九州各県の病害虫防除所情報では、7月上旬まで多飛来の報告はなし (-)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果および一般圃場の発生状況、他県の飛来状況から、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
ダイズ	紫斑病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1)巡回調査圃場(昨年11月)では、紫斑粒発生率0.06%(平年0.2%)と平年並に少(±)</p> <p>考察: 昨年の発生状況から、本圃への感染源の持ち込みは平年並に少ないと考えられ、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	コガネムシ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1)予察灯(4月第1半旬~7月第4半旬)では、誘殺数はドウガネブイブイ473頭(平年270.8頭)と多、ヒメコガネ217頭(平年142.0頭)と多(+)</p> <p>2)県予察圃フェロモントラップ(5月上旬~7月上旬)では、誘殺数はマメコガネ424頭(平年165.9頭)と多、ドウガネブイブイ28頭(平年44.9頭)と少、ヒメコガネ4頭(平年12.3頭)と少(+)</p> <p>3)一般圃場では、発生量は無~やや多(概して平年並に少)(±)</p> <p>考察: 予察灯およびフェロモントラップの誘殺状況を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	ハスモンヨトウ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1)県予察圃フェロモントラップ(6月第5半旬~7月第4半旬)では、誘殺数は菰野町197頭(7年平均264.4頭)と少の傾向、津市262頭(7年平均329.0頭)とやや少の傾向、松阪市嬉野川北町254頭(7年平均212.6頭)と多の傾向(±)</p> <p>考察: 現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	吸実性カメムシ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1)予察灯(4月第1半旬~7月第4半旬)では、誘殺数はイチモンジカメムシ46頭(平年42.1頭)と平年並、クサギカメムシ1頭(平年149.4頭)と少、ミナミアオカメムシ280頭(3年平均88.0頭)と多の傾向(+)</p> <p>考察: 予察灯の誘殺状況から、予想発生量はやや多と考えます。</p>
カンキツ	黒点病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1)1か月予報(7月19日発表)によると、期間の前半は平年に比べ晴れの日が少なく、後半は平年と同様に晴れの日が多い予想(±)</p> <p>2)県予察圃(7月中旬)では、果実発病度42.9(平年29.4)と多(+)</p> <p>3)巡回調査圃場(7月第2週)では、果実発病度2.7(平年0.8)と多(+)</p> <p>4)一般圃場では、発生量は並~やや多(概してやや多)(+)</p> <p>5)感染源となる枯枝は平年並(±)</p> <p>考察: 一般圃場での発生状況を重視して、現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	かいよう病	-	温州 平年並 中晩柑 やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月19日発表)によると、期間の前半は平年に比べ晴れの日が少なく、後半は平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬、新甘夏)では、発病葉率 1.5%(平年 10.2%)、発病果率 0.8%(平年 22.4%)といずれも少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、温州みかんは発病葉率 0%(平年 0.7%、ただし5か年は0%)、発病果率 0%(平年 0.1%)といずれも平年並(±)、中晩柑は発病葉率 2.7%(平年 12.9%)と少(-)、発病果率 0%(平年 2.5%、ただし5か年は0%)と平年並(±) (温州±、中晩柑-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 温州みかんでは現状の発生量は平年並に少ないと考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。中晩柑類では現状の発生量はやや少と考えられ、大きな増加の要因はないことから、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ミカンハダニ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月19日発表)によると、期間の前半は平年に比べ晴れの日が少なく、後半は平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、100葉当り寄生頭数は無防除区で3.3頭(平年13.5頭)と少、慣行防除区で11.1頭(平年2.7頭)と多 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率 69.2%(平年 37.7%)、新葉における寄生葉率 16.2%(平年 8.4%)、寄生頭数 0.49頭/葉(平年 0.33頭/葉)といずれも多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概してやや多) (+)</p> <p>考察: 現状の発生量は圃場によるばらつきがありますがやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃黄色粘着トラップ(7月上旬)では、誘殺数 0.87頭/日(平年 2.74頭/日)と少 (-)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、100果当り寄生虫数 8.3頭(平年 11.7頭)とやや少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、被害果率 0.5%(平年 1.1%)と平年並 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概してやや少) (-)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
果樹共通	カメムシ類	-	少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 予察灯(御浜町:7月1日~7月10日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 28 頭(平年 3,018 頭)、ツヤアオカメムシ 3 頭(平年 207 頭)と少 (-) 2) 予察灯(畑・松阪市:6月21日~7月20日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 15 頭(平年 676 頭)、ツヤアオカメムシ 0 頭(平年 315 頭)、クサギカメムシ 1 頭(平年 143 頭)と少 (-) 3) フェロモントラップ(6月17日~7月16日)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は山地(津市白山町川口)で 159 頭(平年 875 頭)、中間地(津市白山町二本木)で 111 頭(平年 1,619 頭)、平坦地(松阪市嬉野川北町)で 1 頭(平年 384 頭)と少 (-) 4) 巡回調査圃場(7月第2週)では、圃場への飛来は未確認、ナシ圃場 1 か所で果実被害を確認 (±) 5) 一般圃場では、発生量はやや少 (-) <p>考察: 現状の発生量は少と考えられ、引き続き予想発生量は少と考えます。</p>
	炭疽病	-	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1 か月予報(7月19日発表)によると、期間の前半は平年に比べ晴れの日が少なく、後半は平年と同様に晴れの日が多い予想 (±) 2) 県予察圃(二番茶期)では発病葉数 0.1 枚 / m²(9 か年平均 0.8 枚 / m²)と少の傾向 (-) 3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、当年発病葉数 1.3 枚 / m²(平年 3.2 枚 / m²)と少だが、新葉で発病を確認 (±) 4) 一般圃場では、発生量はやや少 (-) <p>考察: 現状の発生量はやや少と考えられますが、巡回調査圃場で新葉に発病が確認されたことから、今後の増加を考慮して予想発生量は平年並と考えます。</p>
	カンザウハダニ	-	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1 か月予報(7月19日発表)によると、期間の前半は平年に比べ晴れの日が少なく、後半は平年と同様に晴れの日が多い予想 (±) 2) 県予察圃(7月上旬)では、寄生葉率 0%(平年 2.1%、ただし 6 か年は 0%)と平年並、寄生頭数 0 頭 / 枚(平年 0.07 頭 / 枚、ただし 6 か年は 0 頭 / 枚)と平年並 (±) 3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、寄生葉率 0%(平年 0.6%)と少、寄生頭数 0 頭 / 枚(平年 0.01 頭 / 枚)とやや少 (-) 4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±) <p>考察: 現状の発生量は平年並と考えられ、大きな増減要因はないので、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノミドリヒメヨコバイ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月19日発表)によると、期間の前半は平年に比べ晴れの日が少なく、後半は平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃吸引粘着トラップ(6月第4半旬~7月第3半旬)では、捕殺数4頭(平年13.9頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、たたき落とし虫数1.1頭(平年2.1頭)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察: 一般圃場の状況を重視して、現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月19日発表)によると、期間の前半は平年に比べ晴れの日が少なく、後半は平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃吸引粘着トラップ(6月第4半旬~7月第3半旬)では、捕殺数3,636頭(平年7,657.4頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、たたき落とし虫数45.0頭(平年26.0頭)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	チャノコカクモンハマキ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月19日発表)によると、期間の前半は平年に比べ晴れの日が少なく、後半は平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(6月第2半旬~7月第3半旬)では、誘殺数805頭(平年338.3頭)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、巻葉数0枚/m²(平年0.4枚/m²、ただし5か年は0枚/m²)と平年並だが、成虫の発生および幼虫による食害葉を確認 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 県予察圃フェロモントラップ誘殺数および巡回調査結果を重視して、現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
イチゴ	炭疽病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月19日発表)によると、期間の前半は平年に比べ晴れの日が少なく、後半は平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週、親株)では、発病株率0%(平年0.4%)と平年並に少 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概してやや少)だが、一部で発病を確認 (±)</p> <p>考察: 現状の発生量は平年並と考えられ、予想発生量は平年並と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期(平年比): 平年の発生日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数	-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年発生日	1	2	3	4	5	6	
評価	早	やや早		平年並				やや遅			遅			

発生量(平年比): 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感じることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並	やや多	多	

発生量(程度): 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量(平年比)」と比

べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よりやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率(平年比): 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除が必要と予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要になると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか、防除しなくても済むと予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例: 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項: 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量(平年日)の予察根拠」の見方

(±): 平年並の要因

(+): 発生量増加または発生時期遅延の要因

(-): 発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 今月のトピックス「QoI 剤(ストロビルリン系殺菌剤)によるイネいもち病防除の注意点について」

イネいもち病における殺菌剤耐性菌の発生防止対策、その背景

昨年度、県外において、QoI 剤(ストロビルリン系殺菌剤。表 1 参照)耐性イネいもち病菌(以下、耐性菌)の発生が確認されました。

三重県内では現在のところ、耐性菌の発生は確認されていません。

表1 イネいもち病を対象としたQoI剤(ストロビルリン剤) 最大年1回の使用としましょう

薬剤の分類	有効成分名	商品名の例
菌11	アゾキシストロピン	アミスター
	オリサストロピン	嵐
	メミノストロピン	イモチエース、イモチミン、オリブライト、オリザトップ

薬剤の分類はFRAC Code List (2012年2月現在)による。

QoI 剤はイネいもち病に対する防除効果が高く、優れた薬剤であり、県内でも広い面積で使用されています。しかし、QoI 剤は耐性菌の発生する危険性が高いと言われています。

三重県では、平成 18 年に MBI-D 剤(商品名 ウィン、デラウス、アチーブ)の耐性菌が確認され、使用を控えた経緯があります。QoI 剤を適切に使用することにより、優れた効果を持続させるよう努めましょう。

表2 イネいもち病を対象としたQoI剤以外の農薬

薬剤の分類	有効成分名	商品名の例
菌P (抵抗性誘導剤)	プロベナゾール	オリゼメート、Dr.オリゼ、ビルダー、ジャッジ
	チアジニル	ブイゲット、アプライ
	イソチアニル	ルーチン、スタウト、ツインターボ
菌16.1	トリシクラゾール	ビーム、ラテラ
	ピロキロン	コラトップ
	フサライド	ラブサイド
菌6	IBP	キタジンP
	イソプロチオラン	フジワン、 (ピロキロンとの混合剤)ピカピカ、フジトップ

イネいもち病防除における QoI 剤耐性菌の発生を未然に防ぐための注意点

1) QoI 剤の使用は最大年 1 回までとし、採種圃場での使用禁止を再度徹底しましょう。

2) 長期持続型 QoI 剤の育苗箱処理は、耐性菌の選択圧を高める要因の一つとして考えられています。できる限り、作用機構の異なる薬剤とのローテーションで使用するか、耐性菌の発生リスクの低い薬剤(菌 P 抵抗性誘導剤 表 2)を選択しましょう。

3) QoI 剤を本田で散布する場合、葉いもちに対しては初発前あるいは発生初期に、穂いもちに対しては薬剤の使用適期に散布しましょう。

4) 健全種子の使用、塩水選や種子消毒の徹底、圃場衛生管理など、いもち病防除の基本となる防除対策を徹底しましょう。

5) 種子は、できるだけ耐性菌の確認されていない県(三重県では確認されていません)で生産されたものを使用しましょう。やむを得ず、耐性菌の発生が確認された県で生産された種子を用いるときは、QoI 剤と作用機構の異なる薬剤で防除してください(表 2)。

6) 以上の取り組みを地域一帯となって実施しましょう。

7) QoI 剤を使用したにもかかわらず、効果が著しく低かった場合は、病害虫防除所、農業研究所、農業改良普及センターや、関係団体へご連絡ください。

(表2 続き) イネいもち病を対象としたQoI剤以外の農薬

薬剤の分類	有効成分名	商品名の例
菌U14	フェリムゾン	(フサライドとの混合剤)ブラシン、 (トリシクラゾールとの混合剤)ノンプラス
菌24	カスガマイシン	カスミン、 (トリシクラゾールとの混合剤)ゲットワンエース、ダブルカット
菌1	チオファネートメチル	トップジンM
	ベノミル	ベンレート

薬剤の分類はFRAC Code List (2012年2月現在)による。

6. 気象のデータ

東海地方 1 か月予報 (平成 25 年 7 月 19 日 名古屋地方気象台発表)

東海地方の向こう 1 か月は、期間の前半は気圧の谷や湿った気流の影響で平年に比べて晴れの日が少ないでしょう。後半は太平洋高気圧に覆われて平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

1 週目 7 月 20 日～ 26 日	期間のはじめは高気圧に覆われて概ね晴れますが、気圧の谷や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、終わりは雨の降る日があるでしょう。	津の降水日数・晴れ日数の平年値 2.3 日・4.2 日
2 週目 7 月 27 日～ 8 月 2 日	気圧の谷や湿った気流の影響で平年に比べて晴れの日が少ない見込みです。	同 2.0 日・4.7 日
3～4 週目 8 月 3 日～ 16 日	太平洋高気圧に覆われて平年と同様に晴れの日が多い見込みです。	同 3.9 日・9.5 日

東海地方週間天気予報 (平成 25 年 7 月 24 日 10 時 30 分 名古屋地方気象台発表)

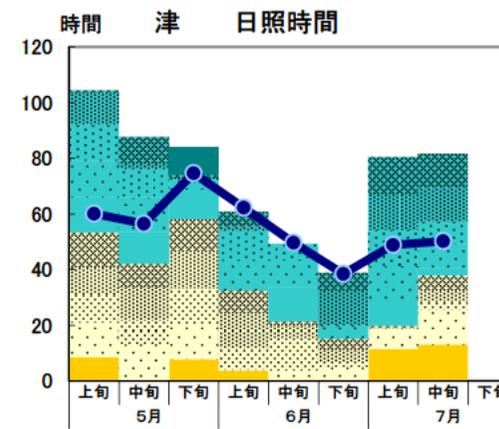
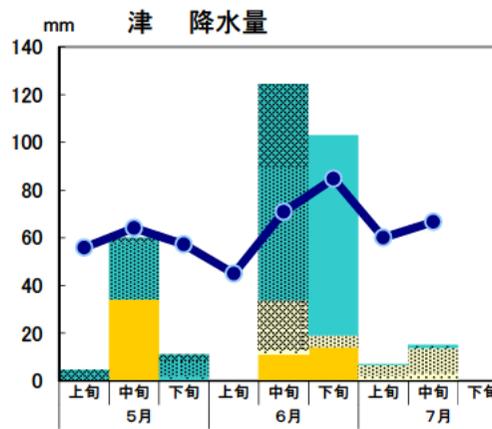
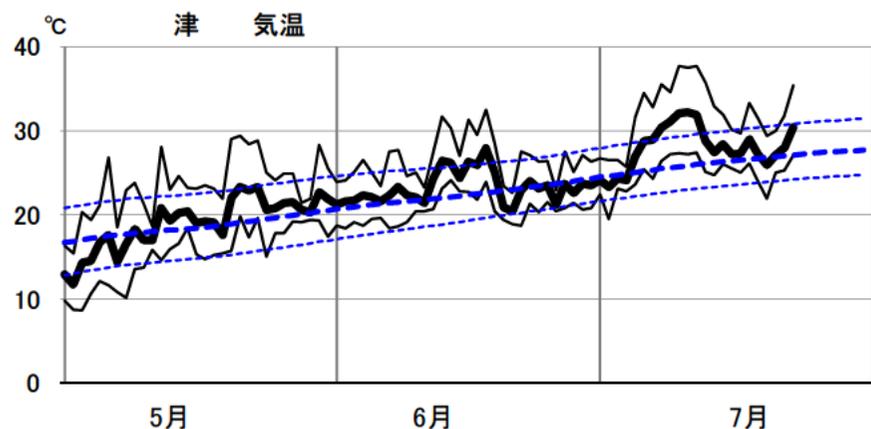
予報期間 7 月 25 日～7 月 31 日

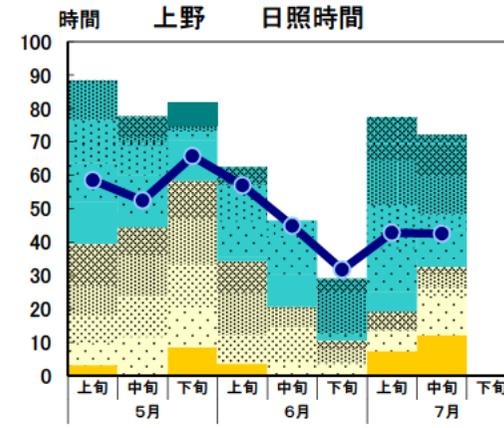
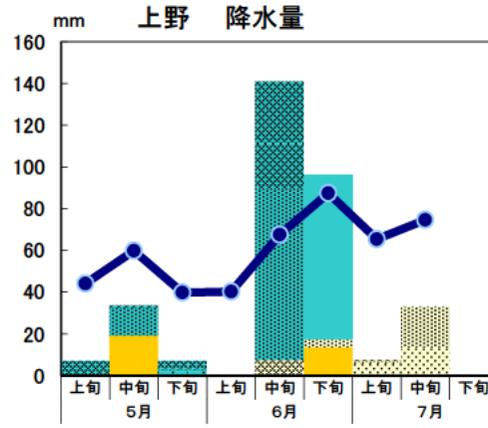
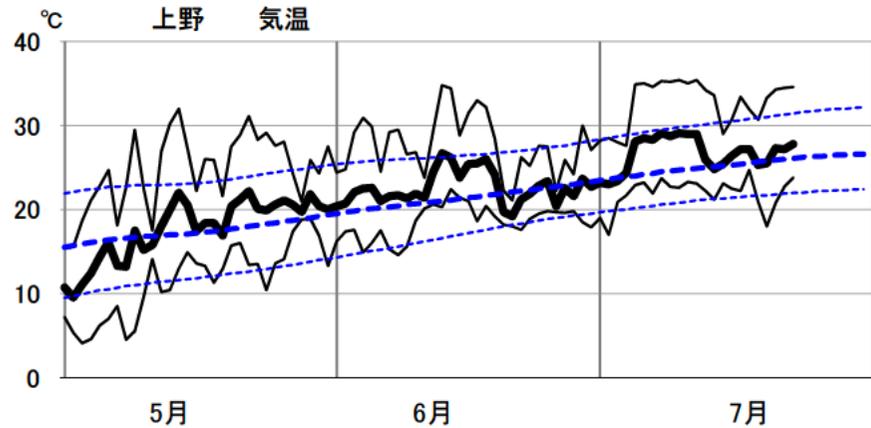
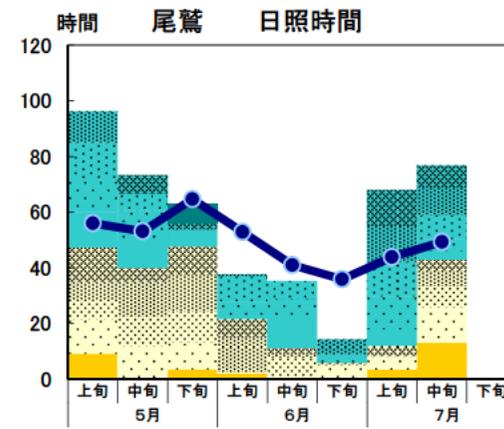
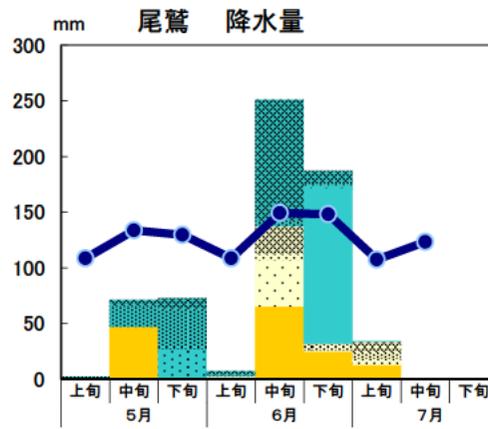
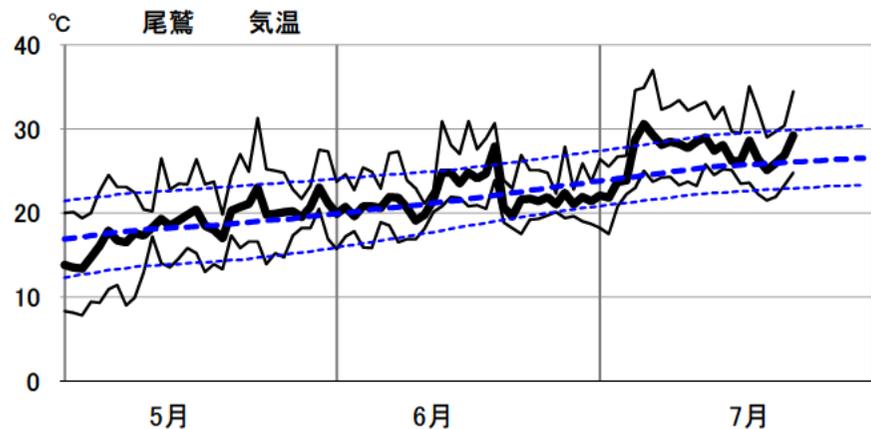
向こう一週間は、気圧の谷や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、期間のはじめは雨の降る所があるでしょう。

最高気温と最低気温はともに、概ね平年並の見込みです。

降水量は平年より少ないでしょう。

気象の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成) (7 月 23 日まで)





- 凡例
- 平均
 - 最高
 - 最低
 - - - 平年平均
 - - - 平年最高
 - - - 平年最低

- 凡例
- 31日
 - 旬10日目
 - 旬9日目
 - 旬8日目
 - 旬7日目
 - 旬6日目
 - 旬5日目
 - 旬4日目
 - 旬3日目
 - 旬2日目
 - 旬1日目
 - 旬平年値

- 凡例
- 31日
 - 旬10日目
 - 旬9日目
 - 旬8日目
 - 旬7日目
 - 旬6日目
 - 旬5日目
 - 旬4日目
 - 旬3日目
 - 旬2日目
 - 旬1日目
 - 旬平年値

7. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

1) 記載基準の注意点

平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

- | | |
|---------------|---------------|
| 第1回 4月25日(済み) | 第2回 5月23日(済み) |
| 第3回 6月20日(済み) | 第4回 7月25日(今回) |
| 第5回 8月29日(木) | 第6回 10月24日(木) |
| 第7回 3月20日(木) | |

3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアドレスからお入りください。

http://www.mate.pref.mie.lg.jp/Bojyosyo/files/h25yohotebiki_.pdf

5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/merumaga.htm>

6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報提供システム」

http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm